

北海道えりも町悲恋沼 名の由来について

～ アイヌ語「シトウ」を使おう！

中岡利泰¹⁾

キーワード

シトウ、悲恋沼、えりも町、襟裳岬、百人浜、源義経、

はじめに

悲恋沼は、北海道えりも町の百人浜、襟裳岬の北約7.6km地点にあり、日高山脈襟裳国定公園内に位置する。

えりも町内の地名はアイヌ語が由来しているものが多いが、悲恋沼は日本語である。本論では、悲恋沼の名の由来、名付けられた経緯、伝承について論議する。

1. 悲恋沼の自然環境

悲恋沼は周囲約450m、水深は深いところでも1m30cm程度、底には泥が堆積している。流入する河川はなく、周囲の湿地から流れ込んでいる。現在、流出ケ所が一ヶ所あり、コンクリート製柵が設置され、悲恋沼の水位が保たれている。一方、水生生物の行き来が妨げられている。

周囲にはヨシ、ミズゴケ類などが生育している。水生植物としてはヒルムシロ、ジュウモンジ植物類が確認されている。

ミズカマキリ、ミズスマシ、ゲンゴロウ、カゲロウ類などの水生昆虫、ヘイケボタル、環境省の絶滅危惧種に指定されているニホンザリガニが生息している。

魚類は、ペットの廃棄放流されたメダカ(山川2012)、フナが確認されているが、近年、フナは確認されていない。2019年にはスナヤツメ類が確認

された(えりも町生き物調査隊 私信)。

また、移入種と考えられるオオタニシ、マルタニシ、ドブガイが生息している。

鳥類では、夏鳥としてノビタキ、ホオアカ、オオジシギなどが繁殖し、旅鳥としてオオハクチョウ、マガモ、カルガモ、カイツブリなどが一時期滞在する。また、ハリオアマツバメ、ツバメ、シヨウドウツバメが渡りの途中に給水する。特別天然記念物、絶滅危惧種Ⅱ類(VU)に指定されているタンチョウが飛来する。

2. 調査方法

悲恋沼の名に関する調査は、北海道立図書館、北海道文書館、北海道大学附属図書館、函館市中央図書館、えりも町郷土資料館が所蔵する図書、絵図、およびえりも町史、えりも町史増補版、えりも昔語り記録集「潮風とともに」などを資料とした。なお、調査対象は江戸時代から昭和63年(1988)とした。

3. 悲恋沼のアイヌ語

えりも町史(1971)には、『シートウ 原名は「シ・トウ」。語源は「シ・ト」(Si-to 大きな沼)の意。一石一宇塔のすぐそばの沼である』とある。アイヌ語の「シ」には、「本当の」という意味もある(萱野茂1996)。

悲恋沼が位置する百人浜は、砂丘が幾重にも発達し、砂丘と砂丘の間には後背湿地が形成されている。しかし、江戸後期・明治以降の開発により、表土が飛ばされ裸地化した。昭和28年(1953)か

1) えりも町郷土資料館 〒058-0203 北海道幌泉郡えりも町字新浜 207

ら始まる「えりも岬緑化事業」により、排水溝が整備され乾燥化し、植樹がすすめられたことから、現在では、後背湿地は、ほとんど見られなくなった。後背湿地は、降水量や季節により、水が溜まったり少なくなったりする特徴がある。悲恋沼は一年中、豊かな水を蓄えていることから、アイヌは「シ・ト」=『本当の沼』と呼んでいたと推測できた。

なお、えりも岬海砂地造林に関する地元ならびに観光客の意識調査(昭和50年)には、「とし沼」との名称記載があるが、右横書き(右から左へ記述)の資料を読み違えた可能性がある。

4. 文書・絵図に出てくる悲恋沼

悲恋沼が描かれている絵図を図1.①～④に示した。

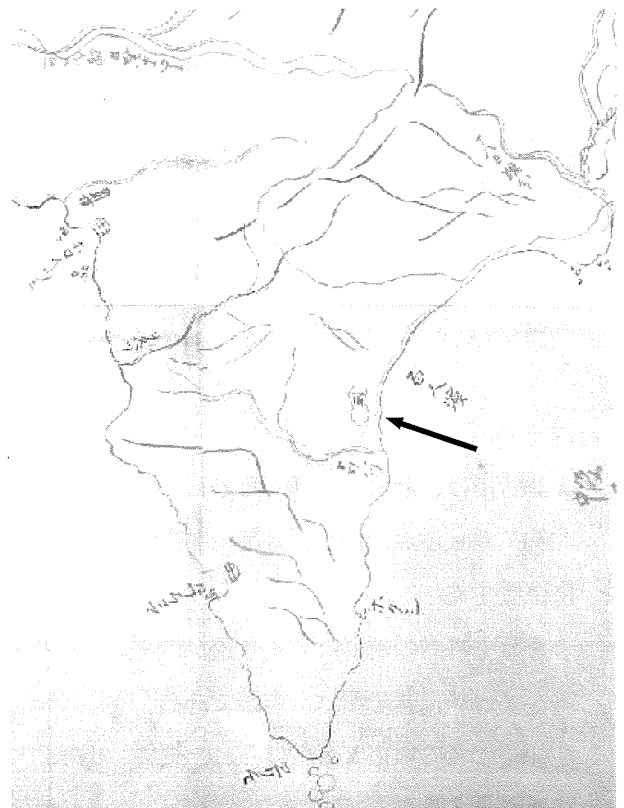
①「蝦夷海岸之図」は、制作年は不明であるが、寛政十一年(1799)に開削された猿留山道の経路を探索した図と考えてよいことから、1799年以前のものであると考えられる。百人濱、沼、トワヘツの記述がある。

②「東西蝦夷山川地理取調図」(松浦武四郎1859)には、沼の形状は記されているが、名などはない。和百人ハマ ト云、トワヘツの記載あり。また、対である「東西蝦夷山川地理取調紀行」(松浦武四郎1859)には『トワベツ(小川、幅三間)上に沼有』とあり、海岸線を移動した武四郎は、シトウ(悲恋沼)を見ていないと推測できる。「取調図」では、沼から海に川が流れるように描かれている。

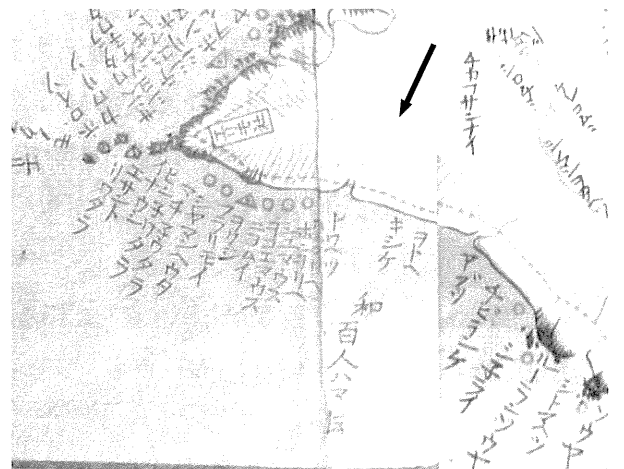
③「東蝦夷地ホロイツミ場所絵図面」の制作年は不明である。沼の形状は記されているが、名称などの記述はない。トワヘツの記載あり。

④「東蝦夷地御場所絵図」の制作年は不明である。海につながる沼と陸封された沼が一つずつ描

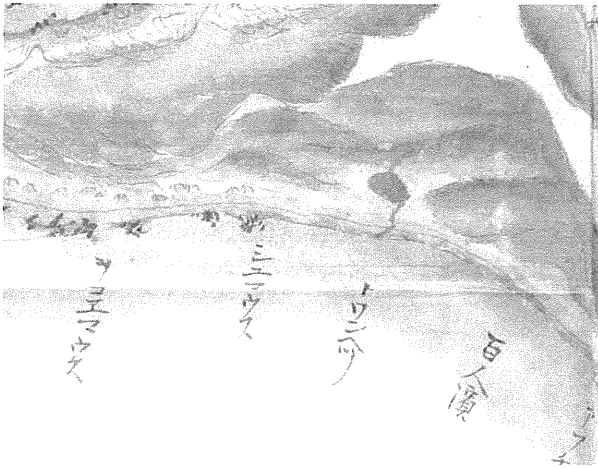
図1. 絵図にみる悲恋沼



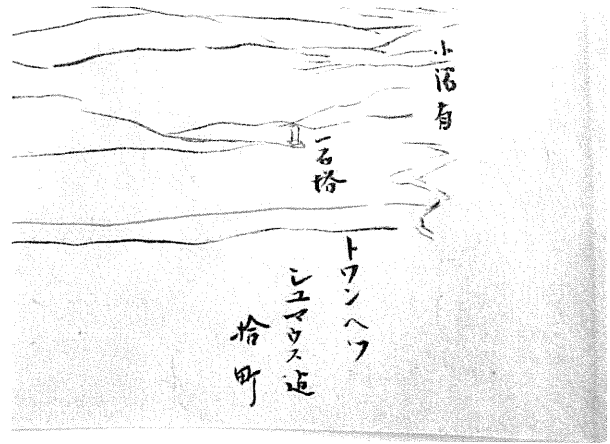
① 蝦夷海岸之図 (前幕領期)
北海道大学附属図書館蔵



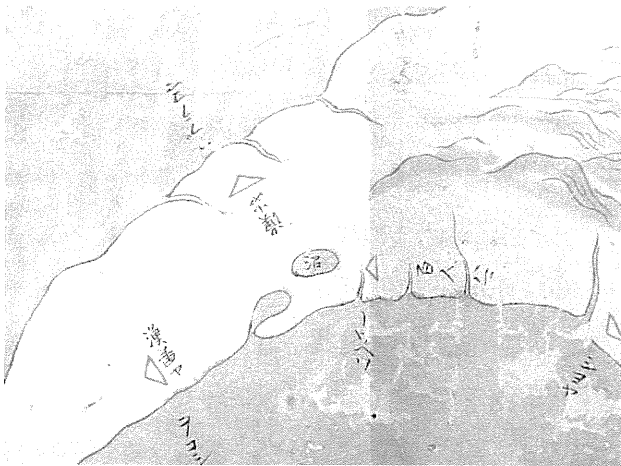
② 東西蝦夷山川地理取調図 (安政六年1859)
函館市中央図書館蔵



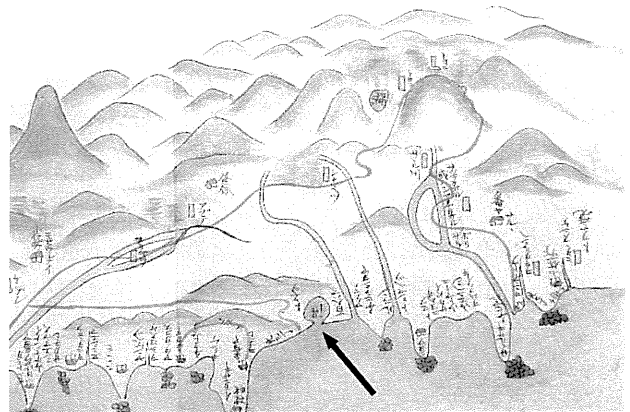
③ 東蝦夷地ホロイツミ場所絵図面（後期幕領期？）
函館市中央図書館蔵



⑥ 福嶋屋文書（七）（安政二年1855）
函館市中央図書館蔵



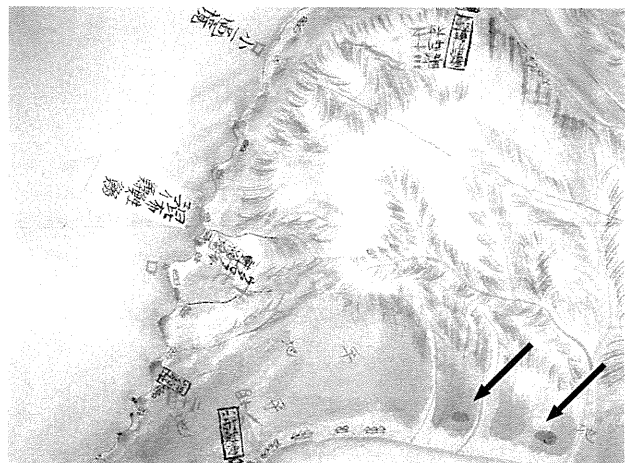
④ 東蝦夷地御場所絵図（後期幕領期？）
函館市中央図書館蔵



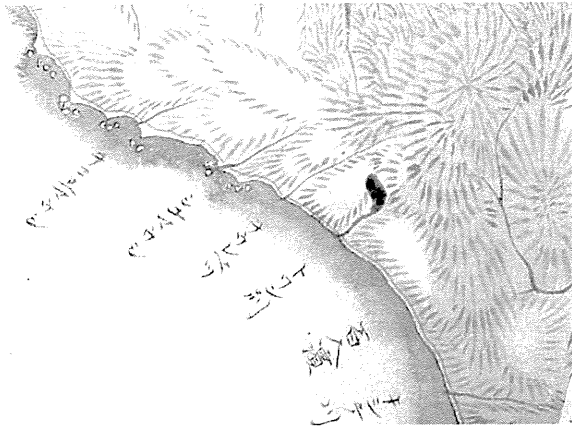
⑦ 罕有日記（安政四年1857）
函館市中央図書館蔵



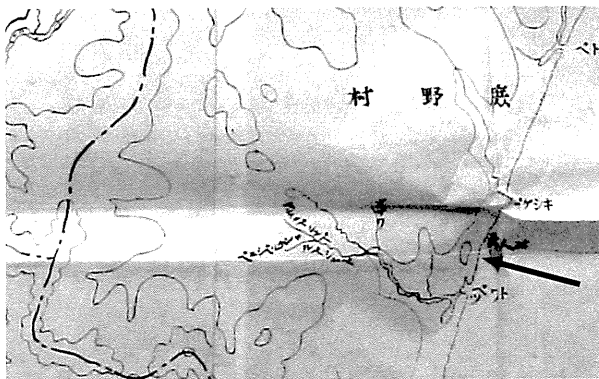
⑤ 東蝦夷地廻浦図絵（後幕領期？）
函館市中央図書館蔵



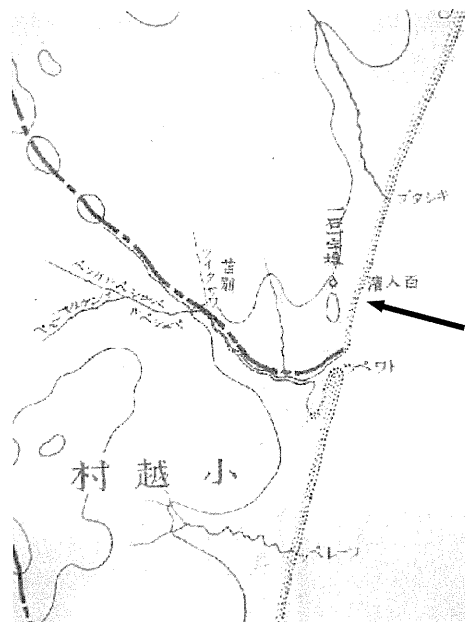
⑧ 日高国幌泉群区画部（明治初期）
北海道大学付属図書館蔵



⑨ 日高国跋涉道新畧図 (明治5年1872)
北海道大学付属図書館蔵



⑩ 日高郡幌泉之図 (明治40年1907)
函館市中央図書館蔵



⑪ 幌泉村一勢管内図 (昭和6年1831)
北海道大学付属図書館蔵

かれ、陸封された沼に「沼」と記述されている。百人ハマ、トワベツと記載あり。

⑤ 「東蝦夷地廻浦図絵」の制作年は不明である。沼、シト、トワベツの記述がある。絵図に「シト」と記載されているのは、調査資料の中では、この絵図のみである。沼から海に川が流れるように描かれている。

⑥ 「福嶋屋文書(七)」(安政二年1855)には、小沼有、一石塔、トワンベツ、シュマウス迄拾町と記載されている。石碑が描かれている。一石塔とは、文化三年(1806)に建立された一石一字塔のことである。

⑦ 「罕有日記」(森一馬・高井佐藤太1857)には、海とつながる沼が描かれ、沼と記載されている。他に百人ハマ、トウベツと記載されている。

⑧ 「日高国幌泉郡区画部」には、陸封された沼が二つ描かれ、一つに「沼」と記載されている。

⑨ 「日高国跋涉道新畧図」(1872)には、沼から海に川が流れるように描かれている。他にトワン別と記載されている。

⑩ 「日高郡幌泉之図」(1907)には、図示はされているが、名はない。百人浜、トワベツの記載あり。

⑪ 「幌泉村一勢管内図」(1831)には、沼が図示されているが名称はない。他に百人濱、トワベツ、一石一字塔が記載されている。

沼から海に川が流れるように描かれている絵図は、②③⑤⑨であるが、悲恋沼の南側を苦別川が流れていることから「沼から川が流れている」という口伝えの情報、または憶測から、沼と流出する川を描写した可能性が推測された。また、後述する金丸節夫氏の「沼でカレイをすくって遊んだ」との記録から、かつては、悲恋沼は自然河川で海とつながっていたと考えられる。

5. 地形図の記載について

陸地測量部、国土地理院等発行の2.5万図、5万図の悲恋沼に関する記述について調査した。5万図は2.5万図の測量、記述を基に作成されている。

平成18年(2005)発行の2.5万図「襟裳岬」には、悲恋沼の図示はあるが、名称の記述はない(表1-1.)。百人浜、一石一字塔の名称は記載されている。

5万図の悲恋沼などに関する記述について表1-2.に示した。5万図「襟裳岬」の一番古いものは、明治29年発行のもので、悲恋沼が図示され、百人浜が記載されている。平成13年発行のものまでに9回編集修正測量され、更新されている。

悲恋沼の図示については、明治29年に記載されているが、大正10年のものには記載がない。昭和21年の地形図から継続的に記載されている。

百人浜の名称は、明治29年発行の5万図から名称が記載されている。また、一石一字塔は昭和53年発行の5万図から継続的に記載されている。

これらのことから、沼の存在は図示されていたが、「悲恋沼」の名称は地図掲載されるほど一般化されていなかったといえる。

6. 図書館などの所蔵資料にみる悲恋沼

北海道立図書館、北海道大学附属図書館、えりも町郷土資料館が収蔵する資料のうち、行政発行資料、観光ガイドブックなど、大正4年(1915)から昭和63年(1988)までの64点について、悲恋沼に関する記述、百人浜、隣接する一石一字塔について、その記載の有無をまとめた(表2.)。

百人浜という名称が歴史文書に最初に記載されるのは、天明5年(1785)「三国通覧図説」であり、様々な文書に記載されている(えりも町1971)。今回の調査資料(図1.表2.)からも、江戸時代か

ら百人浜の存在と名称が認識されていることが確認できる。

一石一字塔は、文化三年(1806)に建立されており、えりも町の観光に関する書籍には記載されることが多い。図1.⑥には「一字塔」と記載され石碑が描かれている。一石一字塔は、昭和6年(1931)発行の「幌泉村勢」以降の多くの資料に記載されていた。

「悲恋沼」の名称が最初に記載されていた資料は、昭和40年(1965)に幌泉町が発行した「町勢要覧」である(表2.)。それ以前の資料には、幌泉村が発行した資料でさえ、「悲恋沼」の名称は記載されていない。

昭和41年(1966)発行の「ほっかいどう むかしあつたとき 道央編」には「悲恋沼は口碑伝説では無名沼、昭和39年(1964)の観光絵葉書でも無名でした。名前が付いたのは最近のようです。」と記載されている。

昭和40年代初頭からの襟裳岬観光ブームの時期に発行された観光ガイドブックにも「悲恋沼」の名称が記載されていないことから、全国的には観光名所と認識されず、百人浜観光の一部とみなされていた可能性がある。

「悲恋沼」の名称が頻繁に記載されるのは、昭和50年(1975)以降である。えりも町やえりも観光協会が編集出版に関わった資料については、一部記載されていない資料もあるが、多くの書籍などに記載されるようになった時期である。

全国で購入できる観光ガイドブック「ブルーガイドパック2」(昭和55年発行)に、「悲恋沼」が記載されていることから、昭和50年代中ごろには、全国的な名称になっていったと考えられた。

表 1-1. 地形図 (1:25,000「襟裳岬」) における悲恋沼・百人浜・一石一字塔の記載一覧

発行年	測量年 (修正など)	発行者	悲 恋 沼		百人浜	一石一字塔
			沼の 図示	名称 表示	名称 表示	名称 表示
昭和 62 年 (1987)	昭和 52 年 (1977) 測量 昭和 60 年 (1987) 修正測量	国土地理院	あり	なし	あり	あり
平成 18 年 (2005)	昭和 52 年 (1977) 測量 平成 18 年 (2005) 更新	国土地理院	あり	なし	あり	あり

表 1-2. 地形図 (1:50,000「襟裳岬」) における悲恋沼・百人浜・一石一字塔の記載一覧

発行年	測量年 (修正など)	発行者	悲 恋 沼		百人浜	一石一字塔
			沼の 図示	名称 表示	名称 表示	名称 表示
明治 29 年 (1896)		陸地測量部	あり	なし	あり	なし
大正 10 年 (1921)	大正 9 年 (1920) 測量	大日本帝国 陸地測量部	なし	なし	あり	なし
昭和 21 年 (1946)	大正 9 年 (1920) 測量 昭和 21 年 (1978) 編集	内務省 地理調査所	あり	なし	あり	なし
昭和 33 年 (1958)	昭和 31 年 (1956) 測量	地理調査所	あり	なし	あり	なし
昭和 44 年 (1969)	昭和 43 年 (1968) 資料修正	国土地理院	あり	なし	あり	なし
昭和 53 年 (1978)	昭和 52 年 (1977) 測量	国土地理院	あり	なし	あり	あり
昭和 55 年 (1980)	大正 9 年 (1920) 測量 昭和 53 年 (1978) 編集	国土地理院	あり	なし	あり	あり
昭和 62 年 (1987)	昭和 52 年 (1977) 測量 昭和 60 年 (1987) 修正測量	国土地理院	あり	なし	あり	あり
平成元年 (1989)	大正 9 年 (1920) 測量 昭和 62 年 (1989) 修正	国土地理院	あり	なし	あり	あり
平成 13 年 (2000)	昭和 52 年 (1977) 測量 平成 12 年 (1999) 修正測量	国土地理院	あり	なし	あり	あり

表2. 悲恋沼・百人浜・一石一字塔の記載一覧 (1/4)

資料名	発行年	発行者・著者	悲恋沼		百人浜	一石 一字塔
			沼の図示	名称表示	名称表示	名称表示
北海道庁浦河支庁管内統計一斑	大正4年(1915)	浦河支庁	なし	なし	あり	なし
幌泉村勢	大正12年(1923)	幌泉村	あり	なし	あり	なし
幌泉村勢	大正14年(1925)	幌泉村	あり	なし	あり	なし
幌泉村勢	昭和2年(1927)	幌泉村	あり	なし	あり	なし
日高大観	昭和3年(1928)	浦河支庁	なし	なし	なし	なし
幌泉村勢	昭和4年(1929)	幌泉村	あり	なし	あり	なし
百人浜 一石一字塔 謹解	昭和6年(1931)	住吉神社社司	なし	なし	なし	なし
幌泉村勢	昭和6年(1931)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村勢一斑	昭和7年(1932)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村勢	昭和8年(1933)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村勢要覧	昭和9年(1934)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村勢要覧	昭和10年(1935)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村勢要覧	昭和11年(1936)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉村名所案内	昭和20年(以前)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
日高路を行く	昭和24年(1949)	畑中武夫	あり	なし	—	—
村勢要覧	昭和25年(1950)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
幌泉市街図	昭和25年(1950)	幌泉村?	なし	なし	あり	あり
幌泉村	昭和26年(1951)頃	幌泉村、吉田初三郎	あり	なし	あり	あり
幌泉村勢	昭和31年(1956)	幌泉村	なし	なし	あり	あり
日高今昔叢史	昭和31年(1956)	小関一雄	なし	なし	あり	あり
道立公園	昭和31年(1956)	北海道	なし	なし	あり	あり
ほろいずみ 開基八十年町政施行 町勢要覧	昭和34年(1959)	幌泉町	なし	なし	あり	あり
幌泉村全図 (1:50,000)	昭和34-45年頃 (1959-1970頃)	幌泉村	なし	なし	あり	なし
ブルーガイドブックス35 北海道(初版)	昭和37年(1962)	実業之日本社	なし	なし	あり	あり
最新旅行案内1 北海道(初版)	昭和37年(1962)	日本交通公社	なし	なし	あり	あり
襟裳岬 黄金道路を行く	昭和38年(1963)	国鉄北海道地方自動車事務 所、襟裳観光協会	なし	なし	あり	あり

表 2. 悲恋沼・百人浜・一石一字塔の記載一覧 (2/4)

資料名	発行年	発行者・著者	悲恋沼		百人浜	一石 一字塔
			沼の図示	名称表示	名称表示	名称表示
襟裳岬 周遊券指定地 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～10月バス運行、襟似接続8本、広尾接続8本) ◆放牧の写真に沼が写り込み	昭和38年(1963)	札幌鉄道管理局北海道地方自動車事務所 襟裳観光協会	写真	なし	あり	あり
襟裳岬 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～10月バス運行、襟似接続9本、広尾接続7本)	昭和39年(1964)	北海道国鉄バス 襟裳観光協会	なし	なし	あり	あり
襟裳岬 周遊指定地 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～10月バス運行、襟似接続7本、広尾接続7本)	昭和40年(1965)	北海道国鉄バス	なし	なし	あり	あり
町勢要覧 幌泉町	昭和40年(1965)	幌泉町	写真	あり	あり	あり
えりも 周遊指定地 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～8月バス運行、襟似接続5本、広尾接続6本)	昭和41年(1966)	北海道幌泉町 えりも観光協会	なし	なし	あり	あり
えりも 周遊指定地 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～8月バス運行、襟似接続6本、広尾接続6本)	昭和42年(1967)	札幌鉄道管理局北海道国鉄バス	なし	なし	あり	あり
えりも 周遊指定地 *時刻表なし ◆放牧の写真に写り込み	昭和43年(1968)	札幌鉄道管理局北海道国鉄バス	写真	なし	あり	あり
幌泉町全図	昭和41年(1966)以降	幌泉町	あり	なし	なし	—
最新旅行案内1 北海道(12版)	昭和42年(1967)	日本交通公社	なし	なし	あり	あり
えりも道立自然公園 ほろいずみ	昭和44年(1969)	幌泉町	写真	なし	あり	あり
最新旅行案内1 北海道(16版)	昭和45年(1970)	日本交通公社	なし	なし	あり	あり
ほろいずみ 開基八十年町政施行 町勢要覧	昭和46年(1970)	幌泉町	なし	なし	あり	あり
えりも シーライン 周遊指定地 *襟似～襟裳岬～広尾 (7～8月バス運行、襟似接続7本、広尾接続7本) ◆放牧・一石一字塔の写真に写り込み	昭和46年(1970)	札幌鉄道管理局 北海道国鉄バス	写真	なし	あり	あり

表2. 悲恋沼・百人浜・一石一金字塔の記載一覧 (3/4)

資料名	発行年	発行者・著者	悲恋沼		百人浜	一石一金字塔
			沼の図示	名称表示	名称表示	名称表示
えりも シーライン 周遊指定地 HOKKAIDO DISCOVER ⇒ JAPAN *一石一金字塔横から一周 道産子馬 ¥100 ◆放牧・一石一金字塔の写真に写り込み	昭和47年(1971)	日本国有鉄道 北海道国鉄バス	写真	なし	あり	あり
えりも シーライン 周遊指定地 HOKKAIDO DISCOVER ⇒ JAPAN *乗馬の期間・6月1日～10月中旬まで一石一金字塔 横から一周 道産子馬 ¥200	不明	えりも町 えりも観光協会	なし	なし	あり	あり
えりも町史	昭和46年(1971)	えりも町	あり	あり	あり	あり
日高の観光	昭和48年(1973)	日高支庁	なし	あり	あり	あり
えりも岬海砂地造林に関する地元なら びに観光客の意識調査 *1	昭和50年(1975)	水利化学研究所	あり	あり とし沼	あり	なし
アイヌの歴史と百人浜	昭和50年(1975)	原田了介	—	あり	あり	あり
雄大な大自然 襟裳道立自然公園 えりも岬 *どさん子馬	昭和50年(1975)	国鉄・国鉄バス・えりも町・ えりも観光協会	写真	なし	あり	あり
道立公園にある町 えりも	昭和50年(1975)	えりも町	あり	あり	あり	あり
北海道えりも道立自然公園 えりも岬	昭和51年(1976)	日本国有鉄道 国鉄バス え りも町 えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
北海道えりも道立自然公園 えりも岬	昭和51年(1976)	札幌鉄道管理局 国鉄バス えりも町 えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
北海道えりも道立自然公園 えりも岬	昭和51年(1976)	札幌鉄道管理局 国鉄バス えりも町 えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
北海道えりも道立自然公園 えりも岬	昭和51年(1976)	札幌鉄道管理局 国鉄バス えりも町 えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
えりも えりも町勢要覧	昭和52年(1977)	えりも町	あり	なし	あり	なし
えりも 町勢要覧	昭和54年(1978)	えりも町	あり	あり	あり	あり
北海道えりも道立自然公園 えりも岬	昭和55年(1979)	札幌鉄道管理局 国鉄バス えりも町 えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
ブルーガイドバック2 阿寒網走利尻	昭和55年(1980)	実業之日本社	あり	あり	あり	あり

表 2. 悲恋沼・百人浜・一石一字塔の記載一覧 (4/4)

資料名	発行年	発行者・著者	悲恋沼		百人浜	一石 一字塔
			沼の図示	名称表示	名称表示	名称表示
えりも 開基 100 年記念町勢写真集 (どさんこ乗馬の写真あり)	昭和 55 年 (1980)	えりも町	あり	あり	あり	あり
国鉄バスガイド資料	昭和 56 年 (1981)	国鉄バス様似営業所	—	あり	あり	あり
襟裳岬から登別温泉 (拓殖バスガイド教本) 「昭和 38 年現在」の記述あり	昭和 56 年 10 月 (1981) 以前 * 2	北海道拓殖バス (株)	あり	あり	あり	あり
えりも黄金ラインの旅 様似—えりも—広尾 ◆写真キャプションは百人浜	昭和 57 年 (1982)	札幌鉄道局 国鉄バス 様似町 えりも町 広尾町	写真	なし	あり	あり
えりも岬へ	不明	えりも観光協会	あり	あり	あり	あり
ほろいずみ えりも道立公園 <悲恋沼伝説の記載あり>	不明 (1958-1981 の間)	幌泉町 幌泉町観光協会	あり	あり	あり	あり
日高山脈襟裳国定公園 えりも黄金ライン	昭和 60 年 (1985)	えりも黄金ライン協議会	あり	あり	あり	あり
えりも 海と大地のふるさと	昭和 63 年 (1988)	えりも町	あり	あり	あり	あり
ROUTE 日高山脈襟裳国定公園 336	昭和 63 年 (1988)	—	あり	あり	あり	あり

* 1 えりも岬海岸砂地造林基礎調査報告書

* 2 北海道立図書館 受入期日

7. 襟裳岬観光ブームと悲恋沼

えりも町史増補版(えりも町 2001)によると、「昭和 40 年「全国観光地ベスト二十」の海岸・海峡・島・岬の部門で襟裳岬がトップに選ばれ、昭和 41 年「新日本旅行地百選」に襟裳岬が六位、岬部門では四位に入り、えりも岬観光ブームが高まった。悲恋沼の周囲を回る乗馬(どさんこ引馬)に人気があった。国鉄バスの観光便ではバスガイドが沿線の名所、産業、アイヌ伝説などの観光案内をして好評を得た。昭和 49 年には、悲恋沼横にレストハウスが建設され観光拠点として賑った。」とある(えりも町 2001)。

観光ガイドブック「ブルーガイドパック 2」(昭和 55 年発行)に悲恋沼の名称が記載される以前、昭和 38 年(1963)発行の「襟裳岬 周遊指定地」の観光ガイドをみると、7~8 月のバスの運行が一日 8 便あり、昭和 40 年以前すでに襟裳岬観光が脚光を得ていたことがわかる。

8. 悲恋沼に関する伝承などについて

国鉄バスが観光便を運航していた時期に、バスガイドにより悲恋沼の紹介が行われていた。その文を国鉄バスガイド資料(1981)から引用する。

左手に見えております沼は悲恋沼でございます。

寛文年間の頃、当時油駒場所が開かれることになり、浜屋久七が請負をすることになりました。

その久七の息子久作とピリカメノコ マエラとの恋物語でございます。

マエラは百人浜の山へ入った所に住んでいた日高アイヌの一族の娘でした。

久作とマエラは、ふとしたことから思いをかわすような仲となり、毎日毎日、夜、えりも岬の岩陰で人目を忍んで会うようになったのです。

でも二人の清い恋も長くは続きませんでした。

民族の争いは、いつの世にもあるように、当時勢力争いをしてきた十勝アイヌと日高アイヌの戦いが始まったのでございます。

久作の方は、長い蝦夷生活を終え、内地へ帰る日が近づいてきました。二人は恵まれぬ恋を嘆きましたが、どうすることもできません。

日に日に戦いは激しくなり、マエラは家族とともに山の中に避難いたしました。

幾日が過ぎたある日、マエラがこの浜へ来たとき、すでに久作たちを乗せた船が、えりも岬を後に内地に向かって出帆したところでした。

永久の別れとなったこの日の船出を悲しみ、浜辺で泣くマエラの姿が幾日も続いたのです。

それからは、誰いうことなく、悲しい恋の涙でできたこの沼を、悲恋沼と呼ぶようになったのです。

秋風の吹く頃になると、この沼にもさざ波が立ち、もの淋しい感じになるのでございます。

この話（通称：「悲恋沼伝説」または「アイヌ伝説」、以下、「悲恋沼伝説」と記す）は、えりも町役場に勤めていた熊谷英一氏（昭和26年1951生まれ、奥さんが国鉄バスのバスガイドをしていた）によると、昭和40年代の観光ブームを迎える頃、創作したものである（聞き取り、石川慎也氏、平

成19年11月30日）、別に、著者は熊谷氏から、えりも町内で伝えられていた話を基に創作したものであると聞き取りしている。

以上のことから、この話は、襟裳岬の観光ブームの昭和40年前、国鉄バスの観光便が盛んになったころに創作されたものである。

襟裳岬が観光地として大きく取り上げられ、えりも町地域の観光振興の取り組みが高まり、観光資源の一つとして「悲恋沼伝説」が創作された。

次に、悲恋沼伝説の基になった伝承について探る。

百人浜悲恋沼近く、苫別地区に居住していた金丸モト氏（大正11年1922生まれ）によると、

昔から悲恋沼でしたよ。悲恋沼って難しい名前ではなかったけどね。

源義経が襟裳岬に上がって、三枚岳の馬蹄湖にひそんであった。そのときに老アイヌの娘さんと恋に落ちたけども、義経はどんどん逃げて行って、残されたアイヌの娘さんが泣いて溜まったのが悲恋沼だって。

親からでも、友達からでも聞いたね、何か書いたものでもあったかもしれないね。観光やる前、あそこで草競馬もやってたんですよ、楽しみながらね。

沼の水はきれなかったからね。

（えりも昔語りを記録する会2007）

との記録されており、伝承されてきたことがわかる。

元役場職員の種綿義雄氏（昭和16年1941生まれ）は、「昭和47年（1972）に観光を担当した当時、すでに「悲恋沼」と呼ばれていた。名付けられたのは少し前だと思う。金丸の爺さん（節夫氏[金丸モトさんの夫]の大正8年（1919）生まれの父、当時84・85歳位）が、アイヌの涙でできた沼と伝説を話していた。その金丸さんが子供の頃、沼でカレイをすくって遊んだと聞いた。」（採録：

中岡利泰 2006 年 3 月 25 日)

これらことら、金丸モトさんは、ご主人節夫さんの父（義父）から、伝承したことになる。

国鉄バスのバスガイドの悲恋沼伝説では、男性が和人の青年、金丸モト氏の話では、男性が源義経と内容が異なる。

悲恋沼伝説は、アイヌの娘と和人青年との悲恋物語であるが、同様の悲恋話は北海道内各地に残されており、和人側からみた創作話である。

源義経にまつわる伝承を基に、観光客受けするよう、アイヌメノコと和人青年の悲恋物語が創作されたといえる。

源義経に関わる伝承も和人視点での創作物語であり、今回の資料では、その起源を遡ることができないが、江戸後期、明治から大正時代に本州から移住してきた和人によって、語り継がれてきた物語の可能性がある。

悲恋沼伝説は、昭和 40 年（1965）前に、伝承されてきた物語を基に創作されたと判断する。

まとめ

えりも町字庶野の百人浜にあり、現在「悲恋沼」と呼ばれている沼は、アイヌ語で「シト（シトウ）」と呼ばれており、江戸時代より、その存在が知られていた。

昭和 40 年初頭の襟裳岬観光ブームの前に、地元で伝承されていた話から、観光客受けするよう、国鉄バスガイドの観光用として「悲恋沼伝説」が創作された。以降、「悲恋沼」という名称は、えりも町、えりも観光協会などの関係者が関わる出版物に記載され、昭和 50 年代半ばには、一般的に使用されるようになった。しかしながら、国土地理院の地形図にはいまだ記載されていない。

えりも町百人浜にある沼の名称は、えりも地域におけるアイヌ文化への理解を深めるためにも、

史実とは無関係に創作された「悲恋沼伝説」由来の名称「悲恋沼」を用いるのではなく、本来の名であるアイヌ語「シト」または「シトウ」用いるべきであろう。

引用文献

- えりも昔語りを記録する会（2007）「潮風とともに」
- えりも町（1971）「えりも町史」
- えりも町（1980）「えりも 開基 100 年記念町勢写真集」
- えりも町（1988）「えりも 海と大地のふるさと」
- えりも町（2001）「増補えりも町史」増補版
- えりも観光協会（発行年不明、平成初期）「えりも岬へ」
- 畑中武夫（1949）「日高路を行く」
- 日高支庁（1973）「日高の観光」
- 北海道（1956）「道立公園」
- 北海道鉄道管理局ほか（1963）「襟裳岬 周遊券指定地」
- 幌泉村（1923）（1925）（1927）（1929）（1931）（1932）（1933）（1935）（1936）「幌泉村勢一斑」
- 幌泉村（1951）「幌泉市街図」
- 幌泉村（1959 以前）「幌泉村全図」
- 幌泉村・吉田初三郎（1951 頃）「幌泉村」
- 幌泉町（1965）「町勢要覧」
- 幌泉町（1966-1970 頃）「幌泉町全図」
- 幌泉町（1969）「えりも道立自然公園 ほろいずみ」
- 実業之日本社（1962）「ブルーガイドブックス 35 北海道」初版
- 実業之日本社（1962）「ブルーガイドブックス 2 阿寒網走利尻」

- 萱野茂 (1996) 「萱野茂のアイヌ語辞典」三省堂
国鉄バス様似営業所 (1981) ガイド資料.
古跡一雄 (1956) 「日高今昔叢史」
日本交通公社 (1962) 「最新旅行案内1 北海道」
初版
日本交通公社 (1967) 「最新旅行案内1 北海道」
12版
日本交通公社 (1970) 「最新旅行案内1 北海道」
16版
住吉神社社司 (1931) 「百人浜 一石一字塔 謹解」
水利化学研究所 (1975) 「えりも岬海砂地造林に関
する地元ならびに観光客の意識調査」～えりも
岬海岸砂地造林基礎調査報告書
坪谷京子 (1996) 「ほっかいどう むかしあつたと
さ 道央編」共同文化社.
浦河支庁 (1915) 「北海道庁浦河支庁管内統計一斑」
浦河支庁 (1928) 「日高大観」
山川雄大 (2012) 「えりも町悲恋沼からメダカの個
体群を確認」えりも研究 (9) 1-4.

